



「退任にあたって」

学長 金川 克子



2009年4月1日に就任して4年が経過し、退任を迎えることになりました。縁の少ない神戸の地への赴任には正直言ってそれなりの不安はありましたが、多くの方々の支えにより何とか任務を果たすことができたのではないかと、必ずしも全てにおいて賛同いただけたとも思いませんが、一応の自己評価をしています。4年を振り返ればさまざまなことが走馬燈の様に浮かんできます。いくつかの観点でまとめ、足跡をたどってみたいと思います。

1) 4年間で強く印象に残っていること：

- ①大学の行事である入学式、卒業式のことなど。春に新入生を迎え、また春に卒業生を送り出す。どの年にも本学が看護系大学としての使命を果たすことが出来たか振り返り、若い世代への期待の気持ちを抱く。任期途中の2011年3月の卒業・修了式から、新設の大学ホールで開催されるようになった。多くの方々の寄付や支援により出来上がった大学ホールは、周囲の建物とマッチした佇まいで、さまざまな催物にも活用されている。管理面では未解決の課題も多くあるが、地域に開かれた大学施設として今後さらなる有効活用へと道を拓いていくと考えられる。
- ②国際交流の基礎づくりができたこと。本学には、海外との研究活動を活発におこなっている教員が多く在籍しており、日頃から頼もしく感じていた。一方、大学間レベルでの国際交流を活発にすることは長らく本学の課題の一つであった。幸い在任中に学部学生のアメリカ（シアトル市シアトル・パシフィック大学）での短期海外研修制度を開始し、同じくワシントン大学（シアトル市）と学術協定を締結することができたことも印象深い。また日韓地域看護学術集会を本学で開催した（2011年7月）ことも印象に残っている。さらにはベトナムとの草の根技術協力事業（神戸国際交流事業団への協力事業）へ本学からも積極的に関与するなど、いずれも緒に就いたばかりではあるが、今後の本学の国際交流の礎となる各種事業であったと思う。
- ③大学基準協会による評価を受けたこと。7年に1度受けることが義務化されている大学評価を2010年に受けた。私の赴任前の大学の状況に対する評価ではあったが、学長として真摯に受け止める立場であったことにかわりない。評価は、自己評価書に基づき評価基準に沿って綿密に行われた。私にとっては本学の状況を知るにはよい機会であったといえる。教職員皆が、各々の立場で改善すべき点は改善し、次回の評価に備えている。ここでは詳細は割愛するが組織運営の面で検討すべき課題が多く浮き彫りになったことも印象に残っている。

2) 大学運営に携わって：

私は、長年教育界に身を置いた人間であるので、他の世界のシステムや文化等の理解が充分ではないことは自覚しているが、時としてそれで良いとも思う。しかし、「大学」のイメージは時代と共に変化しており、学問の殿堂のみならず地域にも開かれた場所であるべきとされ、昨今の大学運営には経営的感覚が必要になってきている。大学と一口に言っても種類も多様で、一括して論ずることはできない。看護系大学に関して言えば、設置者に拠れば国公立があり、学域設置状況からは単科複合形態等がみとめられ、賦与できる資格の有無も大学に拠って異なれば、運営状況としても法人化されている、いないの区別等、さまざまに分類される。本学を實際、どの方向に差し向けるかという舵取りには随分と骨が折れる。全教員一丸となって目標を定めこれに向ってエネルギーを貯え、必要な時に力を発揮していく姿は夢物語のようにも思うが、大学運営にはそれが重要であるという私の考えが果たして学内で共有されたかはわからない。

3) 大学運営の責任者と教育・研究者としてのバランスに関して：

大学運営に責任をもつ者として神戸に赴任したものの、そこには私の専門研究領域からは大きく異なる経営学や行政学、管理学などの論理がおおいに必要であった。これらについては、いわば耳学問や経験知を通しての理解から始める他なく、少なからぬ努力が必要であった。かたや自分の研究領域や従来関心を抱いていた領域の研究は手薄になる傾向に陥り易かった。大学の規模にもよるのであろうが、大学運営に携わる者と教育・研究に携わる者としてのバランスをとることは現実には難しかった。期間限定であることを条件にすれば、重点をどちらかに置くことが必要であり、バランスの良し悪しを長い目で見える感覚を持つことも意味あることと感じた。

4) 当大学に期待すること：

看護系大学として、よき看護職の育成が第一使命であり国内外の看護の質の向上に寄与することが大きな目標であることは、自明のことである。これに加えて、教育研究の場の整備、すなわち多岐に及ぶ看護学領域で必要とされるスキルや理論を精査し拡充するために十分な設備を備えた施設をもち、大学の持てる機能を積極的に社会に還元していくための諸策に取り組んでいただきたい。例えば、現在学内で組織されている国際交流地域連携センターを少なくとも4つの点から充実させていくなどが考えられる：（1）教育・研究の充実に向けた研究センターとして；（2）社会貢献の充実に向けた地域・国際連携センターとして；（3）IT関連を含む情報活動の充実に向けた情報センターとして；（4）学生が自由に活動できるボランティアセンターとして。

本学は、1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災の翌年に神戸市民の大きな期待をにない復興のシンボルとして開学し、神戸市民の健康と福祉の向上に寄与することを大きな使命にしている。その精神を忘れずに発展されるよう期待するものである。

大学と地域との連携強化に向けて

地域連携・国際交流センター運営委員長 都筑 千景

神戸市看護大学では、大学の使命である教育・研究に加えて、地域貢献活動に積極的に取り組んでいます。2009（平成21）年度より、大学での地域連携・地域貢献活動の拠点として地域連携・国際交流センター（通称：コラボセンター）を設置し、大学教職員が力を合わせてさまざまな活動を展開しています。現在、コラボセンターの活動は地域連携活動、教育・研究活動、国際交流活動の3つと、これらの活動内容を地域や学外に効果的に発信するため広報活動を柱として進められています。

地域連携活動としては、「コラボカフェ」（以下の記事参照）や「神戸市看護大学・まちの保健室」、神戸市西区との連携による「命の感動体験」、「プレパパ・プレママセミナー」など、行政や職能団体と連携した健康支援活動を行っています。また、ユニティ公開講座や地域の看護職に対する公開講座、地域団体への出前健康講座など、大学の知の蓄積を活用した学習や交流

の場づくりにも取り組んでいます。

教育・研究活動では、地域の方々による「教育ボランティア」を導入しています。地域の方々に教育ボランティアとして大学の演習、実習に加わっていただくことで、学生はよりリアルな学びを深めることができ、また地域の方々と学生との交流につながっています。このように、神戸市看護大学では地域の方々に対する健康支援活動を広げていくと同時に、地域の方々と共に支援しあう連携づくりも進めて行きたいと思っています。

また、今年度より国際交流に関する内容もコラボセンターで取り組むこととなり、より地域に根差した地域連携・国際交流活動を推進していきたいと考えています。みなさまのご支援とご協力をよろしくお願いいたします。（p.4「JICA研修生受け入れ報告」、p.5「学生海外研修報告」、p.7「医療通訳・コーディネーターの育成のため」等、関連記事参照）

コラボカフェの紹介

療養生活看護学 慢性病看護学分野 池田 清子（コラボカフェリーダー）

平成24年4月から地域との交流活動のなかに、新たに大学の施設を活用した子育て支援事業（神戸市地域子育て支援拠点事業「ひろば型」）がスタートしました。この事業の名前は、『コラボカフェ（通称）』です。「コラボカフェ」の「コラボ」はCollaboration「共同」の略を意味し、大学の教職員・学生が地域住民や関連機関と一緒に活動することを意図し、「カフェ」は、子育て中の人々が「ひとやすみ」できるカフェのような場をめざしたいとの意味があります。コラボカフェのねらいは、2つあります。1つは、この事業を通して、大学の教職員が地域住民とともに地域の親と子が健康に育つための子育てに支援を提供することです。2つめは、学生が実際に親子の健康生活支援に参加することで、人々の健康生活を支援する経験を積み、看護職を目指す動機を高める機会を得る場を提供することです。

『コラボカフェ』の対象は就学前のお子さんとその保護者で、事前予約は必要ありませんが、利用初回時に簡単な登録をお願いしています。開設曜日は、毎週火・木・金曜日、時間は10時から12時30分と13時から15時30分です。また、毎日ベテランの保育士3人が勤務していますので、保育に関する相談やママ自身に関わることで相談のある方は、いつでも気軽に保育士とお話しいただくことができます。

開設から約1年がたち1月末で登録者は300組を超えました。1日の平均利用数は11組、こどもは12～13人です。平日のコラボカフェの利用は多くがママとこどもさんですが、大学祭や太山寺児童館・西区の社会福祉協議会と合同で行ったく親子であそぼう秋祭りなどの土曜日開催のイベントではパパの姿も目立ちました。学園都市を含む西区は子育て世代が多いので、

これからは育児中のパパ同士のネットワーク作りやパパ向けの企画も考えていきたいと思います。

コラボカフェはリピーターの利用者も多く、「ここに来た日はこどもがよく遊ぶので、よく寝てくれる。」「保育士さんがこどもの成長と一緒に喜んでくれるので、とても嬉しい。」「一人っ子なので、自分の子どもが健康に育ってくれているのかがどうか不安だったけど、ここに来て他のこどもさんを見て、ああ、うちの子も一緒なのだなと安心します。」「ここに来て、一緒にご飯を食べるママ仲間ができました。」などの感想から、コラボカフェが利用者にとってく安心で人と人の繋がり場>となっていることがわかります。

コラボカフェでは教員と学生によるミニ講義も参加者に好評です。ミニ講義は、親子の健康支援のため、「足の健康」「こどもの感染症」をテーマに開講しました。これらのミニ講義と同時に、こどもの健康面や発達面で看護師に個別の相談を希望する方のために、小児看護学の教員が西区看護協会と協賛で「子育て支援」プログラムも紹介していますが、毎回、コラボカフェの利用者のうち数名の方が「子育て支援」も利用されているようです。

これまでの様子からコラボカフェは、地域の皆様にほっとくつろげる場として受け入れられているように思います。2年目にむけた課題としては、更に学生の参加を促すこと、地域の関連機関との交流を広げていくことがあげられると考えています。



「こどもの感染症」で学生が講義をしている風景

の連携強化に向けて

もの忘れ看護相談の実践をととして

健康生活看護学 老年看護学分野 坪井 桂子

日本において、認知症高齢者は、2012年現在、300万人を超えました。これは、10年前の2倍の数であり、急速な増加に対する認知症対策の強化が急務の課題とされています。このような現状において、認知症高齢者と家族を地域で支える一助となるように、老年看護学分野、地域・在宅看護学分野の教員がもの忘れ看護相談を2012年春より開始しました。

開始にあたって、大学教員が行う地域貢献活動であることをふまえ、教育・研究活動と連動した実践活動にしたいと考えました。そこで、活動開始前の2011年にもの忘れ看護相談に関する地域住民へのニーズ調査と先駆的に取り組む2施設の専門職へのヒアリングを実施し、もの忘れ看護相談プログラムを作成しました。そして、2012年には、このプログラムに基づくもの忘れ看護相談を本学で実施することとなりました。看護相談には、老人看護専門看護師コースの大学院生、老年看護学分野のゼミ生もボランティアとして参加し、実践を学ぶ機会となりました。

2012年に実施した5回の看護相談は、18名の利用がありました。相談内容の分析に同意を得ることができた16名は、自分のもの忘れに関する相談が11名、家族のもの忘れに関する相談が5名でした。自分のもの忘れに関する相談内容は、認知症の疑いに対する不安、医療機関へのかかり方、認知症および予防方法の知識を得たいことが挙げられました。利用者の中には、明らかな認知症が疑われ、認知症専門医を紹介し、受診後抗認

知症薬の治療が開始となった方もいました。一方、家族のもの忘れに関する相談内容は、認知症の症状悪化に対する介護不安、早期受診・介護サービスの導入方法、施設入所中の認知症の家族への接し方、家族が入所する施設の介護方法の不満が挙げられました。いずれの相談についても、不安をまずは傾聴し、パンフレットを用いて情報提供、介護方法の助言を行いました。

もの忘れ看護相談の実践をととして、ほとんどの方が「ゆっくり話を聞いてもらえてよかった」と安堵して帰られる姿を見ると、身近な相談窓口が求められていることを強く感じます。その一方で相談件数の少なさは、自分や家族の認知症について相談することの障壁がまだまだ大きいことを表しているといえます。このような現状に対して、認知症高齢者と家族を地域で支えるしくみづくりに取り組む必要があると考え、2012年秋より西区保健福祉部の保健師、あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）の専門職と相談事例の検討を始めています。

1年間のもの忘れ看護相談をととして見出された課題は、複雑な状況が絡み合っていることも多く、早急に紐解くことができないものばかりではありません。しかしながら、相談事例を詳細に分析し、看護専門職である教員の立場から、認知症高齢者と家族への支援のあり方を検討、実践していきたいと考えます。



相談風景イメージ

地域住民（教育ボランティア）による学生教育への参加協力

健康生活看護学 地域・在宅看護学分野 宇多 みどり

本学では、平成18年度より地域にお住まいの方々に教育ボランティアとして学生の看護教育に、ご協力をいただいています。在宅看護学分野でも平成22年度から、訪問看護のシミュレーション演習に毎年3～4組のご夫婦にモデルとしてご参加いただいております。

訪問看護は、病院、診療所等、施設で行う看護とは異なり、「生活の場」に向かいに行くという性質上、病気や障害に対する適切な判断や看護の工夫はもとより、玄関先での挨拶や靴を揃えるなどの基本的なマナーまでもが求められます。そこで、大学の演習室に、玄関やリビング・トイレなど自宅を模したスペースを設置し、右半身麻痺（多くの人は右利きのため右の麻痺がより生活動作を困難にする）のある療養者とその介護をする妻に扮する教育ボランティアのご夫婦に、退院して間もない場面、機能訓練が思うようにいかない場面、介護で疲れている場面などを想定し演じていただきます。学生は、訪問靴を持って訪れ、玄関のドアを開けるところからシナリオが始まります。そこで初めて、療養者とその介護者の状況を知り、その場で判断しながら、実践に近い看護体験を学習します。

リアリティのあるこの演習は、経時的に状況が変化しそれに対処しなければならぬ看護の難しさを体感し、なにより社会経験が豊富な地域住民の方々からいただく温かいアドバイスは、素直に学生に伝わり、学生にとって真剣に向き合う適度な緊張感と、その後の達成感を導きます。一方、参加していただいた教育ボランティアの方々からは、「介護保険のしくみがわかった」「自宅での介護の方法について知る機会になった」等のご感想をいただき、互いに学べるよき場となっています。

看護教育において、療養者（患者）やその家族と実際に接する機会は、通常では臨床実習以外にありません。しかし、治療を最優先の目的とする臨床の場での教育は、社会経験の殆どない学生にとってはハードルの高いもので、とすれば単なる見学に終わってしまいます。この学習の機会は、“未来の看護師を育てる”というまなざしを持った地域住民の方々の連携協同によって支えられています。



授業風景

JICA 研修生（ベトナム国ダナン市）受け入れ報告 —神戸市国際協力交流センター JICA 草の根技術協力事業への協力—

健康生活看護学 地域・在学看護分野 成瀬 和子

昨年2012年10月22日から28日かけ、神戸国際交流協力センターがおこなうJICA草の根技術協力事業で、ベトナム社会主義共和国ダナン市にあるダナン市産婦人科小児科病院の看護師長6名が研修の為に日本を訪れました。草の根技術協力事業では同病院の看護師の研修体制を構築することを目標に、日本で研修をおこなっています。研修生は来日後、西市民病院での研修を経て、10月27、29～30日に本学での研修に臨みました。

ダナン市は、ベトナム戦争時に最初に米軍が上陸し、基地を構えたため激戦地となった中部に位置するベトナム第三の都市です。市内には国立のダナン市総合病院がありますが、そこから産婦人科と小児科が独立して2012年5月にできたのがダナン市産婦人科小児科病院で、中部地域におけるこの分野の基幹病院になっています。

新しい病院であるため、看護師の約半数が学校卒業後2年以内の若いスタッフです。つまり、新しい病院の新しい看護スタッフの教育のお手伝いをしているのが、我々がおこなっている草の根技術協力事業なのです。スタッフの88%が看護教育を2年しか受けていない中で、師長は4年制大学を卒業しており、どの研修生も非常に優秀です。来日前より日本語を勉強し、

来日中も一生懸命日本語を覚えており、その習得の速さには目を見張りました。

本学では、嶋澤恭子講師と私が研修を担当しました。研修ではダナンからの研修生達が来日時に学んだ感染管理の知識を、帰国後の院内研修で同僚看護師等に伝授するためのアクションプラン作成を支援しました。ベトナムでは看護師が講師となる研修は例がないとのことで、研修生達は戸惑いながらも一生懸命に取り組んでいました。そして夜の12時まで皆でアクションプランの作成に励み、翌朝には素晴らしい成果物を提示してくれました。彼らの仕事に対する意欲と責任感、課題を達成する能力の高さには驚かされるばかりで、ベトナム人看護師の潜在能力の高さを再認識しました。

この事業は2012年より3年間続き、来日研修には年2回6名ずつ計36名の看護師が参加する予定で、本学も引き続き支援を行う予定です。彼らが帰国後日本で学んだことを生かし、ベトナム中部地域の母子保健の改善に寄与してくれることを願っています。



アクションプラン作成中

ラオスの看護リポート：ASEAN 看護師派遣の枠組みに向けて

健康生活看護学 ウイメンズヘルス分野 嶋澤 恭子

現在、ASEAN（東南アジア諸国連合）*ではEU（欧州連合）を手本にしたASEANの域内相互自由化の政策促進が活発化している。2006年12月、ASEANは加盟国間の看護師資格・相互承認を決定した。自国で3年以上の経験があれば、加盟10ヶ国内で看護師登録を行え、看護師として就労することができる。この看護師資格・互換制度の実施には各国の法整備、教育整備が大きな課題として残されている。

「アセアンでラオスの看護師が働くために、法整備をせねばならない。コアコンピテンシーの策定はその核になる。日本ではどうなっているの?」と、昨年の夏、ラオス看護行政官の一人に熱く話しかけられた。ラオスでは2006年に医療法（Law on Health Care）が制定、2008年には「看護助産規則」が保健大臣令として策定されている。この制定に関わった彼女は、規則が未だ現場に浸透していないことを憂い、「この国には時間が必要だ」という。

ラオスでは約5000人の看護助産職が就労している（2008年）。助産師（Midwife）、看護師（Nurse）、看護助産師（Nurse/Midwife）、准看護助産師（Auxiliary/Nurse/Midwife）に分類され、教育内容も異なる。2004年までは准看護助産師が現場の保健医療人材の約8割を占めたが、現在そのアップグレードコー

スが稼働している。現在では、テクニカルディプロマ看護師2.5年コース（2003年開始）、地域助産師（Community Midwife）と登録助産師（Registered Midwife）の2種類の助産師養成（2009年開始）があり、我が国ほどではないが、カリキュラムも含め頻繁な制度の変更を余儀なくされている。しかし、看護助産職の新卒採用率は、約11%と非常に低い。社会主義国ラオスでは、保健医療専門職は全て公務員だが、新人の給与を捻出するほどの国家予算も病院予算も十分ではない。養成学校の卒業をもって資格取得だが、卒業生の殆どは無給ボランティアか他の仕事を選ぶ。

先の看護行政官は言う。「退職した優秀な看護の先輩たちに後輩を育成してほしい。ラオスに看護の職業団体を作りたい。ラオスやアセアンで働くためには看護の質の保証をすること、国家試験制度も重要。」ラオスの「中心」には自国の看護や医療についてビジョンを語る人がいる。共感し行動する同志や後輩がいる。もちろん、日本の看護界にもいるはずだろう。

参考：「アセアン看護助産ワークショップ：国立国際医療センター」
http://www.ncgm.go.jp/kyokuhp/activity/internal/event/pdf/A_20110701_asean.pdf

注）* ASEAN (Association of Southeast Asian Nations: 東南アジア諸国連合) 1967年8月に設立された地域協力機構。2013年現在、加盟は次の10ヶ国。フィリピン、ブルネイ、インドネシア、マレーシア、シンガポール、タイ、ベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマー。

際看護の視点から

国際がん看護学会に参加して

療養生活看護学 慢性病看護学分野 鈴木 志津枝

第17回国際がん看護学会が「質の高い看護実践により患者安全を高める」をメインテーマとして、平成24年9月9日から13日までチェコ共和国のプラハで開催され、51カ国から600名余りの看護職者が参加していた。基調講演では、ヨーロッパがん看護学会前会長のSultan Kav博士が、外来化学療法の発達でがん患者の安全に対するリスクが高まった現状を例に挙げ、看護職が多職種チームの中でリーダーシップ役割を担うことや患者安全に貢献する要因を明確化する研究の必要性を指摘していた。日本では外来化学療法患者の有害事象のマネジメントに関する研究は積み重ねられ、患者安全を高めるためのガイドラインも作成されているが、全国規模で徹底されているとは言い難く、がん患者の安全やがん看護実践の質向上に向けての教育や研究について再考する機会となった。

口演内容は、禁煙指導、がんの予防活動、がん患者への教育方略、Webを用いた教育活動、がん治療の有害事象に対する症状マネジメント、緩和ケアにおける看護師育成などで、様々な研究成果や活動内容であった。中でも、エチオピアから参加されたMasfin Anley氏の活動報告は衝撃的な内容であった。エチオピアは約9000万の人口で80の言語があることや貧困の問題から、がん患者の80%は病気に関する知識がなく末期がんの状態で受診していることや、加えて薬剤や点滴、衛生材料の不足、がん看護を専門とする看護師の不足などにより、がん

患者の安全や質の高い看護実践の提供に支障をきたしているということであった。

ポスター発表は332演題あり、私も共同研究者として科研「在宅療養移行モデルの開発」の成果をポスター発表する機会を得た。国により保健医療提供システムや保険制度の違いもあり、在宅医療への関心もさまざまであった。また学会の合間に、ホスピスを運営している看護職の方からチェコ共和国のホスピスの現状の説明を聞き、Cesta Domeホスピスの見学の機会を得た。チェコ共和国ではホスピス運営は、有志が寄付で運営しているということであった。

国際がん看護学会に参加して、さまざまな国のがん看護の研究や実践の状況を知ることができ視野を広げる機会となった。今後、本学の国際交流を考えていく上で役立てたいと思う。



学会ポスターの前で日本人参加者と共に



Cesta Domeホスピスの運営担当者からの説明

日米臨床事情 アメリカシアトルパシフィック大学との交流：学生海外研修報告

健康生活看護学 地域・在宅看護学分野 小倉 弥生

2012年3月9日～3月22日に、学生19名とともに本学第2回目となる海外研修プログラム「アメリカシアトル看護研修」に参加しました。この時期のシアトルは日本よりもずいぶん寒いのですが、今回の研修期間はシアトルでも例年にない寒さでした。研修の参加者の中には海外渡航が初めての学生もいましたが、シアトルの生活にも日々慣れて毎日の研修をととても楽しんでいました。

研修の内容は、平日の午前中にワシントンアカデミー語学学校にて日々与えられるテーマについて英語でディスカッションをし、さらに当日訪れる研修施設の概要の事前学習、および関連する看護英語を受講しました。研修施設はシアトルパシフィック大学をはじめ、市内の小児病院、がん専門医療機関、地域医療センター等、様々でした。シアトルパシフィック大学では、乳幼児や成人の姿をしたコンピューター内蔵の精巧なシミュレーターを用いた診断技術の演習がおこなわれており、その実際を体験させていただきました（写真）。アメリカと日本では医療制度が異なり、多くの市民は個別に保険に加入しています。今回の各研修施設においても“医療を自ら選ぶ”という

部分が幾多の面に表れていました。高度な専門医療を求めて遠路はるばる州を越えて受診する事も少なくないこと、個別性を重視した患者自身が望む医療が受けられること、患者と家族が入院中でもリラックスして過ごせる居場所と時間の確保が徹底されていることに学生は大きな感銘を受けたようです。また地域医療センターでは保険に加入していない方への医療の在り方や、日々の保健活動と感染症予防の実際を見学することができ、日本における保健医療についても考える機会となりました。この研修を通して海外で働くことを視野に入りたいと話す学生もおり、国際的な活動に大きな関心を寄せる契機となりました。



シアトルパシフィック大学にて

在学生から

(学生ボランティア報告)

岩手県被災地復興支援プロジェクト「夏銀河」に参加して

編入3年生 林 優名

去年の夏季休暇にいわてGINGA-netが主催している学生ボランティアによる岩手県被災地での復興支援プロジェクト・夏銀河に参加しました。

1日目は被災地の視察に行きました。津波により家が流されあとに残された敷地に時間が経ち草が生えている様子や見上げるような大量の瓦礫の山に言葉を失いました。一方で、スーパーや服屋さんなどの商業施設は再開しており、仮設の飲み屋街もあり、復興の様子も見ることができました。2日目からは私たちの班は釜石市の平田地区の仮設住宅でお茶っこサロンを開きました。初日ということで、一軒一軒に挨拶にまわりました。「また来てくれたの。がんばってね」との言葉をたくさん頂きました。お茶っこサロンに集まった方々は震災のときの様子や避難所での生活、現在の思いなど貴重なお話をたくさんして下さいました。夜の班でのミーティングでは、同じ場所に行き、同じ活動をしたのにも関わらず様々な視点からの意見や感想、疑問が出て、とても有意義な時間を過ごすことができました。この日、挨拶まわりをしたときに「はじめはよく行っていたけど、久しぶりに参加したら輪ができていて行きづらくなった」「行って話していても結局震災のときの話になって気持ちが暗くなる」という声が聞かれました。こうした声から、地域のひとたちが交流し、落ち着ける居場所を目指すにはどうしたらよいかを話し合いました。そこで、まずは来たいと思うひとが再び来やすくなるようなきっかけづくりとして、お誘いの声かけと、なにかイベントができればいいなという案が出ました。3日目にこどもが来ていたのですが、仮設住宅の敷地内にこどもの遊び場所がないということに気づきました。4日目、

「かき氷大会」をしようということになり、朝から前日につくったピラを一軒ずつ渡してまわりました。土曜日ということで朝からこどもたちが遊びに来てくれ、平日のお茶っこサロンとはまた違った雰囲気でした。お昼からかき氷大会を行ったのですが、こどもたちだけでなく「はじめて来たわ」「久しぶりに来てみた」とたくさんの方が来て下さり、とても賑わいました。帰り際にこどもたちが見送ってくれ「また来いよ」と言う言葉に嬉しくも、一方で切なくもなりました。

GINGAを通して大きく3つのことを学びました。ひとつは1年5ヶ月たっても被災地では、未だに街並みに瓦礫が残っていること、現地のひとたちの気持ちを聞いて復興にはまだまだ時間がかかることも学びました。2つ目は「仮設」といっても、そこにはたしかに「生活」が存在します。住むひとたちのニーズにこたえる難しさを学びました。3つめは同じ思いをもって今回出逢えた仲間と毎日話し合うことで、自分が感じたことや考えたことがすべてではないことに気づきました。ふだん自分の思いを言い合うことやまわりの思いを聞く場がないのですが、今回は話し合うことで自分のなかにある疑問や思いを解消できるということがよくわかりました。

GINGAを通して出逢った現地のみなさん、岩手県立大学のみなさん、全国の学生さんと一緒に過ごした6日間は本当にかげがえのない経験となり、とても感謝しています。



仲間とともに

卒業生から

千葉県船橋市にある社会保険看護研修センターで認定看護管理者教育課程研修を担当して活躍中の第1期卒業生からのメッセージです。

在学中の皆さんへ：国際看護師協会(ICN)大会を知っていますか

社会保険看護研修センター 教員 大西 淳子（1期生2000年3月卒業）

国際看護師協会（ICN）は世界各国の看護師協会から成る組織で、2年ごとに学術集会と4年毎大会を開催しています。私は在学中に学内の掲示板でその存在を知りました。1998年にカナダで開催されたバンクーバー大会のポスターでした。学術集会に加え学生大会があることや、主要セッションには日本語の同時通訳があることも大きな魅力でした。

開会式では各国の看護師が民族衣装で集まるため（これは女性の数が圧倒的に多いこの職種のメリットですが）とても華やかで、その中でも着物はまるでアイドルになったかのように大人気で写真撮影大会になります。出発前の授業後に大学の先生のマンションにお邪魔して、着物を着る特訓をしていただいた成果でした。また、学生大会では世界中の学生と看護の未来について話し合い、その後の学生パーティーでは、歌って踊って喧嘩して、後日一緒に観光したりもしました。また学会中は、本の中でしか知らない歴史上の看護理論家だと思っていた人々を実際に見ることもできました。他大学の日本人学生とも多く知り合い、今でも交流が続いています。2年後に参加するとき

のためにと英語を学ぶきっかけにもなりました。

一昨年は地中海の島、マルタ島で開催されました。世界の看護事情が肌で感じられ、お国柄や社会情勢、看護師という職種の位置づけまで、何もかもが少しずつ違う場所で働く看護師と交流することができ、とても良い刺激になりました。現地で仲良くなった看護学生さんのお母さんの働く病院を非公式に見学させてもらったり、ICNが主催する公式の病院見学ツアーに参加したりとマルタ共和国の看護事情にも触れることができました。また、学会での質問内容が日本とは全く違っている点もとても刺激的です。1000人規模の会場であっても、建設的なディスカッションが繰り広げられ、時にはジョークや即席のミニ抽選会も交えながら、看護の未来についてともに考える時間を過ごしました。

今年はオーストラリアのメルボルンで5月中旬に開催されます。興味のある方はぜひとも参加を検討してみてください。



職場にて

医療通訳・コーディネーターの育成のために

人間科学 人文科学分野 松葉 祥一

現在、日本に中長期に滞在する外国人は200万人を越え、出産や子どもの医療、慢性疾患、高齢化など保健・医療機関を利用する機会が増えています。また神戸市と兵庫県は、国の成長戦略を受けて、医療を受けることを目的とした外国人の短期滞在を積極的に受け入れる方針を打ち出しています。

このように外国人が日本の保健・医療を受ける際には、医療用語などの言葉だけでなく、日本の医療文化や、病院、保険の制度という壁があると言われていきます。この壁を乗り越えるためには、「医療通訳」だけでなく、患者と医療通訳と医療施設の関係を調整する「コーディネーター」の役割が重要だとされています。患者・家族に最も近い存在であり、医療チームの調整役でもある看護職者には、このコーディネーターの役割が期待されています。

この医療通訳とコーディネーターの育成のために、神戸市看護大学と神戸市外国語大学が協力して、平成23-24年度にはユニティ共同研究交流助成による「医療の国際化に対応した人材育成を目指す大学教育の在り方に関する研究」（金川克子、研究代表）を行い、平成24-26年度には科学研究費基盤研究B（一般）による「医療通訳・コーディネーターの教育プログラム

の看護大学と外国語大学による共同開発」（金川克子、研究代表）を行って、国内外の現状や教育プログラムの研究を続けています。昨年12月8日の神戸市看護大学国際フォーラムでは、「通訳をになう子どもたち——医療とコミュニケーション」を取り上げていただきました。今後も研究会は公開で行いますので、興味のある方は是非ご連絡、ご参加ください。

この研究成果にもとづいて、2013年度から授業や講座を行います。一つは、ユニティの特別提供科目（神戸市外大）として、2013年9月25日から毎週木曜日18:15～19:45に、学園都市大学共同利用機関ユニティで「医療通訳・コーディネーター入門」の授業を行います。異文化理解や医療制度、医療英語などの講義に加えて、医療通訳の演習も行います。対象言語は英語を主体にする予定ですが、希望者がいれば中国語、スペイン語に対応することも考えています。学部学生対象の授業ですが、教員や大学院生の方も歓迎します。もう一つは、2014年2月1日から3月1日までの毎週土曜日14:00～15:30に、同じくユニティで市民連続講座「医療通訳を知っていますか？」を開講します。こちらも演習を含めた一般市民向けの入門講座です。是非ご参加ください。

大学の1年間

行事

2012年 4月5日	入学式
4月17日	定期健康診断
7月6日	大学院特別講義「質的研究におけるマイクロエスノグラフィーの役割」
7月9日	特別講演会「看護師として起業すること」
7月29日～30日	オープンキャンパス
8月31日	大学院博士前期・後期課程入学試験（9月5日合格発表）
9月7日	編入学試験（9月19日合格発表）
10月10日	助産学専攻科特別講演会「泣こよっか ひっ飛ば ー助産師と立法ー」
10月13日	助産学専攻科入学試験（10月25日合格発表）
10月27日	看護専門職公開講座「認知行動療法の基礎と医療・看護への応用」
11月3日	あざみ祭
11月17日	推薦入学試験（11月29日合格発表）
12月3日	特別講演会「難病をもつ子どもとともに生きる母と子の闘病日記」
12月8日	第14回国際フォーラム「通訳を担うこどもたち 医療とコミュニケーション」
2013年 1月19日～20日	大学入試センター試験
2月1日	大学院特別講演会「チーム医療の現場で求められるCNSの役割」
2月25日	一般選抜入学試験前期日程（3月6日合格発表）
3月2日	大学院オープンキャンパス
3月12日	一般選抜入学試験後期日程（3月21日合格発表）
3月15日	卒業式

大学の1年間

人 事 *****

教 員

退 職

2012年	3月31日	蘭 由岐子	准教授
	3月31日	岩 崎 景子	助教
	3月31日	三 浦 藍	助教
	3月31日	兵 頭 静江	助教
	3月31日	山 口 亜希子	助教
	3月31日	伊 藤 由佳	助教
	3月31日	辻 佐恵子	助教

採 用

2012年	4月1日	後 藤 由紀子	助 教
	4月1日	菊 地 慶子	助 教
	4月1日	栗 原 睦美	助 教
	4月1日	鈴 木 千枝	助 教
	4月1日	船 木 淳	助 教
	4月1日	安 川 知里	助 教

昇 格

2012年	4月1日	藤 井 ひろみ	准教授
	4月1日	内 正 子	准教授

職 員

退 職

2012年	3月31日	神 田 芳 伸	学務係長
		祖 田 律 男	事務職員

転 入

2012年	4月1日	栗 田 朋 子	学務係長
	4月23日	西 尾 篤	事務職員
	4月23日	古 田 与利子	事務職員

転 出

2012年	4月23日	安 田 隆 博	事務職員
	4月23日	西 川 節 子	事務職員

平成23年度国家試験合格状況

	保健師	看護師	助産師
受験者数	116名	80名	14名
合格者数	110名	78名	14名
合格 率	94.8%	97.5%	100%

平成23年度学部卒業生・大学院修了生

学 部 卒 業 生	117名
助産学専攻科修了生	14名
大学院修士課程修了生	18名
大学院博士課程修了生	3名

平成24年度入学生

学 部 1 年 次	95名
学 部 3 年 次 編 入	10名
大 学 院 修 士 課 程	23名
大 学 院 博 士 課 程	3名
助 産 学 専 攻 科	15名

編集後記

「回廊」第10号をお届けします。本学では、この春は任期を終えた金川学長を送り、新しい学長が重責を担う席に就くのを見つめるという動きのある春になります。例年のように学生を送り、迎えるキャンパス風景も何か慌ただしく感じます。既に2年を経過した東日本大震災とかつての阪神淡路大震災の幾年過ぎようと癒えることのない嘆きに通底する日本社会の理不尽が春の憂鬱をともしれば誘わんとしています。しかし、これに屈することなく、国内外の人々の健康に寄与し、困難を真摯に見つめ克服しようとする本学の硬軟取り混ぜた取り組みの一端を本号に掲載された記事の数々にごらんいただけたらと思います。（広報委員会）

神戸市看護大学

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地
 電話：078（794）8080（代表） FAX：078（794）8086
 E-mail：madoguchi@tr.kobe-ccn.ac.jp Web：http://www.kobe-ccn.ac.jp